

吾輩は猫である

夏目漱石

【テキスト中に現れる記号について】

：ルビ

（例）吾輩わがはいは猫である

：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）一番どうあく癡悪な種族であつた

：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、 J I S X 0 2 1 3 の面区点番

号または U n i c o d e、底本のページと行数）

（例） 謹

□：アクセント分解された欧文をかこむ

（例）〔 Q u i d a l i u d e s t m u l i

ernisiamici tia e& in im
ica

アクセント分解についての詳細は下記URLを参照
してください

http://www.aozora.gr.jp
/accent_separation.html

吾輩^{わがはい}は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当^{けんとう}がつかぬ。何でも薄暗

いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番^{どうあく}寧^{どう}悪な種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を^{つかま}捕えて煮^にて食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかつた。ただ彼の^{てのひら}掌に載せられてス

ーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあ
ったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の
顔を見たのがいわゆる人間というものの見始みはじめであろ
う。この時妙なものだと思つた感じが今でも残つて
いる。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつる
つるしてまるで薬缶やかんだ。その後猫こにもだいぶ逢あつた
がこんな片輪かたわには一度も出で会くわした事がない。のみ

ならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと煙けむりを吹く。どうも咽むせぼくて実に弱った。これが人間の飲む煙草たばこというものである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の裏うちでしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが

無暗むやみに眼が廻る。胸が悪くなる。到底とうてい助からないと

思っている、どさりと音がして眼から火が出た。

それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら
考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんお

った兄弟が一疋びきも見えぬ。肝心かんじんの母親さえ姿を隠し

てしまった。その上いま今までの所とは違って無暗むやみに明

るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも
容子がおかしいと、ようすのそのそ這はい出して見ると非常に
痛い。吾輩は藁わらの上から急に笹原の中へ棄てられ
たのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな
池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよかろ
うと考えて見た。別にこれという分別ふんべつも出ない。し

ばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと
考え付いた。ニヤー、ニヤーと試みにやって見たが
誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つ
て日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きた
くても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食^く
物の^{もの}ある所まであるこうと決心をしてそろりそろり
と池を^{ひだ}左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そ

こを我慢して無理やりに這^はつて行くとようやくの事

で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這^{はい}入ったら、

どうにかなると思つて竹垣の崩^{くず}れた穴から、とある

邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこ

の竹垣が破れていなかつたなら、吾輩はついに路傍^{ろぼう}

に餓死^{がし}したかも知れのである。一樹の蔭とはよく

云^いつたものだ。この垣根の穴は今日^{こんにち}に至るまで吾輩

が隣家となりの三毛を訪問する時の通路になっている。さ

やしき

て邸へは忍び込んだもののこれから先どうして善い

か分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さ

は寒し、雨が降って来るといふ始末でもう一刻の猶ゆ

うよ

予が出来なくなつた。仕方がないからとにかく明る

くて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考

えるとその時はすでに家の内に這入っておつたのだ。

ここで吾輩は彼かの書生以外の人間を再び見るべき機そうぐう

会に遭遇したのである。第一に逢ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋くびすじをつかんで表へ抛ほうり出した。

いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶって運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙すきを見て

台所へ這はい上あがった。すると間もなくまた投げ出され

た。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上っては

投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを

記憶している。その時におさんと云う者はつくづく

いやになった。この間おさんの三馬さんまを偷ぬすんでこの返

報をしてやってから、やっと胸の痞つかえが下りた。吾輩

が最後につまみ出されようとしたときに、この家うちの

主人が騒々しい何だといいいながら出て来た。下女は

吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿^{やど}なしの小

猫がいくら出しても出しても御台所^{おだいどころ}へ上^{あが}つて来て困

りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撚^{ひね}りながら

吾輩の顔をしばらく眺^{なが}めておったが、やがてそんな

ら内へ置いてやれといったまま奥へ這^{はい}入^いってしまつ

た。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口^く

惜^やしそうに吾輩を台所へ抛^{ほう}り出した。かくして吾輩はついにこの家^{うち}を自分の住家^{すみか}と極^きめる事にしたのである。

吾輩の主人は滅^め多^{った}に吾輩と顔を合せる事がない。

職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思っている。当人も勉強家である

かのごとく見せている。しかし実際はうちのものが
いうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼
の書齋を覗のぞいて見るが、彼はよく昼寝ひるねをしている事
がある。時々読みかけてある本の上に涎よだれをたらして
いる。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色たんこうしよくを帯びて弾力の
ない不活澆ふかつぱつな徴候をあらわしている。その癖に大飯
を食う。大飯を食った後あとでタカジヤスターゼを飲む。

飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽らくなものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が

来る度たびに何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のも
のにははなはだ不人望であつた。どこへ行つても跳は
ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。いかに
珍重されなかつたかは、今日こんにちに至るまで名前さえつ
けてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、
出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍そばにいる事

をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝ひざ

の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背せ中に

乗る。これはあながち主人が好きという訳ではない

が別に構い手がなかったからやむを得るのである。

その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃めしびつの上、夜は炬燵こたつ

の上、天気の良い昼は縁側えんがわへ寝る事とした。しかし

一番心持の好いのは夜よに入いってここのうちの小供の

寢床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入はいつて一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己おのれを容いるべき余地を見出みいだしてどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒さますが最後大変な事になる。小供は——ことに小さい方が質たちがわるい——猫が来た猫が来たといつて夜

中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだつてなどは物指で尻ぺたをひどく叩たたかれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればするほど、彼等は我儘わがままなものだと断言せざるを得ないようになつた。ことに吾輩が時々同衾どうきんする小供のごときに至

つては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さ

にしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したたり、へ、

つついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で

少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追

い廻して迫害を加える。この間もちよつと畳で爪を

磨いだら細君が非常に怒おこってそれから容易に座敷へ

入れいない。台所の板の間で他ひとが顫ふるえていても一向平

気なものである。吾輩の尊敬する筋向すじむこうの白君などは

逢あう度毎たびごとに人間ほど不人情なものはないと言ってお

らるる。白君は先日玉のような子猫を四足産うまれた

のである。ところがそこの家うちの書生が三日目にそい

つを裏の池へ持って行つて四足ながら棄てて来たそ

うだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、

どうしても我等猫族ねこぞくが親子の愛を完まったくして美しい家

族的生活をするには人間と戦ってこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もつとも議論と思う。また隣りの三毛君^{みけ}などは人間が所有権という事を解していないといつて大に憤慨^{おおい}している。元来我々同族間では目刺^{めざし}の頭でも鰯^{ぼら}の臍^{へそ}でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善^よいく

らしいものだ。しかるに彼等人間は毫もこの觀念が

ないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のた

めに掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼ん

りやくだつ

で正当に吾人が食い得べきものを奪うばつてすましてい

る。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持

っている。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こん

な事に関すると両君よりもむしろ楽天である。ただ

その日その日がどうにかこうにか送られればよい。

いくら人間だつて、そういつまでも栄える事もあるまい。まあ気を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したからちよつと吾輩の家の主人が

わがまま

この我儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何といつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほととぎすへ投書

をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけの英文をかいいたり、時によると弓に凝こったり、謡うたいを習ったり、またあるときはヴァイオリンなどをブー
ブー鳴らしたりするが、気の毒な事には、どれもこれ
れも物になつておらん。その癖やり出すと胃弱の癖
にいやに熱心だ。後架こうかの中で謡をうたつて、近所で
後架先生と渾名あだなをつけられているにも関せず一向平いっこう

気なもので、やはりこれは平の宗盛たいらむねもりにて候そうろうを繰返し

ている。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいであ

る。この主人がどういう考になつたものか吾輩の住

み込んでから一月ばかり後ののちある月の月給日に、大

きな包みを提さげてあわただしく歸つて来た。何を買

つて来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマン

という紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心

と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日毎日書斎で昼寝もしないで絵ばかりかいている。

しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘くない

うま

と思ったものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来た時に下の^{しも}のような話をしてゐるのを聞いた。

「どうも甘くうまかけないものだね。人のを見ると何で

もないようだが自ら筆をとって見ると今更いまさらのように

むずかしく感ずる」これは主人の述懐じゅつかいである。なる

ほど詐いつわりのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡めがね越に主人

の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけない

さ、第一室内の想像ばかりで画えがかける訳のもので

はない。昔むかし以太利イタリーの大家アンドレア・デル・サル

トが言つた事がある。画をかくなら何でも自然その

物を写せ。天に星辰せいしんあり。地に露華ろかあり。飛ぶに禽とり

あり。走るに獸けものあり。池に金魚あり。枯木こぼくに寒鴉かんああ

り。自然はこれ一幅の大活画だいかつがなりと。どうだ君も画

らしい画をかこうと思ふならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいつ

た事があるかい。ちつとも知らなかった。なるほど

こりやもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗むやみに感心している。金縁の裏には嘲あざけるような笑わらいが見えた。

その翌日吾輩は例のごとく椽側えんがわに出て心持善く昼ひ寝るをしていたら、主人が例になく書斎から出て来てる寝ねをしていて何かしきりにやっうしている。ふと眼が覚さめて何をしているかと一分いちぶばかり細目に眼をあけて

見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んでゐる。吾輩はこの有様を見て覚えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に擲揄せられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでに十分寝た。欠伸がしたくつてたまらない。しかしせつかく主人が熱心に筆を執つてゐるのを動いては氣の毒だと思つて、じつと辛

ほう

棒しておった。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔の

あたりを色彩いろどっている。吾輩は白白する。吾輩は猫

として決して上乘の出来ではない。背といい毛並と

いい顔の造作といいあえて他の猫に勝るとは決してまさ

思っておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今

吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とはえが

、どうしても思われない。第一色が違う。吾輩は波ペル

ス産シヤさんの猫のごとく黄を含める淡灰色に漆うるしのごとき斑ふ

入いりの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑

うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を

見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなけ

れば褐色とびいろでもない、さればとてこれらを交ぜた色で

もない。ただ一種の色であるというよりほかに評し

方のない色である。その上不思議な事は眼がない。

もつともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫めくらだか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思った。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおってやりたいたいと思つたが、さつきから小便が催うしている。

身内みうちの筋肉はむずむずする。最早もはや一分も猶予ゆうよが出来

ぬ仕儀しぎとなつたから、やむをえず失敬して両足を前

へ存分ぞんぶんのして、首を低く押し出してあゝあと大だいなる

欠伸をした。さてこうなつて見ると、もうおとなし

くしていても仕方がない。どうせ主人の予定は打ぶち

壊こわしたのだから、ついでに裏へ行つて用を足たそう

と思つてのそのそ這い出した。すると主人は失望と

怒りを搔き交ぜたような声をして、座敷の中から

「この馬鹿野郎」と怒鳴った。この主人は人を罵る

ときは必ず馬鹿野郎というのが癖である。ほかに悪

口の言いようを知らないのだから仕方がないが、今

まで辛棒した人の気も知らないで、無暗に馬鹿野郎

呼わりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背中

へ乗る時に少しは好い顔でもするならこの漫罵も甘

んじて受けるが、こっちの便利になる事は何一つ快くしてくれした事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。ひど元来人間というものは自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出来て来て窘めてやらなくてはこの先どこまで増長するか分らない。

わがまま我儘もこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不

徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園ちやえんがある。広くは

ないが瀟洒さつぱりとした心持ち好く日の当る所あただ。うちの

小供があまり騒いで楽々昼寝の出来ない時や、あま

り退屈で腹加減のよくない折などは、吾輩はいつで

もここへ出て浩然こうぜんの気を養うのが例である。ある小

春の穏かな日の二時頃であつたが、吾輩は昼飯後快ちゆうはんご

よく一睡した後、のち運動かたがたこの茶園へと歩ほを運

ばした。茶の木の根を一本一本嗅ぎながら、西側の

杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に

大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づく

のも一向心付かざるごとく、いっこうまた心付くも無頓着な

るごとく、大きな鼾いびきをして長々と体を横よこたえて眠つて

いる。他の庭内に忍び入りたるものがかくまで平氣

ねむ

に睡られるものかと、吾輩は窃かにその大胆なる度

ひそ

胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である

。わずかに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼

ご

の皮膚の上に抛なげかけて、きらきらする柔毛にこげの間よ

り眼に見えぬ炎でも燃え出いずるように思われた。彼

は猫中の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有

している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の

念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立ちよりつして余

念もなく眺ながめていると、静かなる小春の風が、杉垣

の上から出たる梧桐ごとうの枝を軽く誘かろつてばらばらと二

三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかつとその

真丸まんまるの眼を開いた。今でも記憶している。その眼は

人間の珍重する琥珀こはくというものよりも遙はるかに美しく

輝いていた。彼は身動きもしない。双眸そうぼうの奥から射

るごとき光を吾輩の矮小わいしょうなる額ひたいの上にあつめて、御、

めえは一体何だと云った。大王にしては少々言葉が

卑いやしいと思つたが何しろその声の底に犬をも挫ひしぐ

べき力が籠こもっているので吾輩は少なからず恐れを抱いだ

いた。しかし挨拶あいさつをしないと險吞けんのんだと思つたから

「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平

よそお

氣を装よそおつて冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓

はたしかに平時よりも烈しく鼓動しておつた。彼は

おおいけいべつ

大に輕蔑おおいけいべつせる調子で「何、猫だ？　猫が聞いてあき

れらあ。全ぜんてえどこに住んでるんだ」随分ぼうじやくぶじん傍若無人

である。「吾輩はここの教師の家うちにいるのだ」「ど

うせそんな事だろうと思つた。いやに瘠やせてるじゃ

ねえか」と大王だけに氣焰きえんを吹きかける。言葉付か

ら察するとどうも良家の猫とも思われない。しかし

あぶらぎ

その膏切あぶらぎつて肥満しているところを見ると御馳走を食つてゐるらしい、豊かに暮しているらしい。吾輩は

「そう云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかつ

た。「己おれあ車屋の黒くろよ」昂然こうぜんたるものだ。車屋の

黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし

車屋だけに強いばかりでちつとも教育がないからあ

まり誰も交際しない。同盟敬遠主義の^ま的になつてい

る奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感

じを起すと同時に、一方では少々^{けいぶ}輕侮の念も生じた

のである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるか

を^{ため}試してみようと思つて左^さの問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに^{きま}極つていらあな。御^ごめ^めえ^えの^うち^ち

の主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分強^{だいぶ}そうだ。車屋にいと

御馳走^{ごちそう}が食えろと見えるね」

「何^なにおれ^あなんざ、どこの国へ行つたつて食い物に

不自由はしねえつもりだ。御めえ^{おれ}なんかも茶^ち畠^{やば}ばか

りぐるぐる廻^{まわ}つていねえで、ちつと己^{おれ}の後^{あと}へくつ付

いて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに見違える

ように太れるぜ」

「追つてそう願う事にしよう。しかし家は教師の方
が車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

「べらぼう笹棒め、うちなんかいくら大きくたつて腹の足し
になるもんか」

彼はおおいかんしやくさわ大に肝癰に障った様子で、かんちく寒竹をそいだよう

な耳をしきりとぴく付かせてあららかに立ち去った

。吾輩が車屋の黒と知己ちぎになつたのはこれからである。

その後吾輩は度々たびたび黒と邂逅かいこうする。邂逅する毎ごとに彼

は車屋相当の気焰きえんを吐く。先に吾輩が耳にしたとい

う不徳事件も実は黒から聞いたのである。

或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶壺ちやばたけの中で寝ね

転ころびながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつも

じまんばな

の自慢話をさも新しそうに繰り返したあとで、吾

輩に向つて下の^{しも}ごとく質問した。「御めえは今まで

に鼠を何匹とつた事がある」智識は黒よりも余程発

達しているつもりだが腕力と勇氣とに至つては到底^{とうてい}

黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、こ

の問に接したる時は、さすがに極^{きま}りが善^よくはなかつ

た。けれども事實は事實で詐^{いつわ}る訳には行かないから

、吾輩は「実はとろうとろうと思つてまだ捕らないと

」と答えた。黒は彼の鼻の先からぴんと突張つてい

る長い髭をびりびりと震わせて非常に笑つた。元来

黒は自慢をする丈にどこか足りないところがあつて

彼の気焰きえんを感心したように咽喉のどをころころ鳴らし

て謹聴していればはなはだ御ぎよしやすい猫である。吾

輩は彼と近付になつてから直すぐにこの呼吸を飲み込ん

だからこの場合にもなまじい己おのれを弁護してますま

す形勢をわるくするのも愚ぐである、いつその事彼に

自分の手柄話をしやべらして御茶を濁すに若しくはな

いと思案を定さだめた。そこでおとなしく「君などは年

が年であるから大分だいぶんとつたろう」とそそのかして見

た。果然彼は墻壁しょうへきの欠所けつしよに呐喊とっかんして来た。「たんと

でもねえが三四十はとつたろう」とは得意気なる彼

の答であつた。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でも引き受けるがいたち、つてえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向つて酷い目に逢つた」。「へえなるほど」と相槌あいづちを打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰いしばいの袋を持って椽えんの下へ這はい込んだら御めえ、大きないたちの野郎が面喰めんくらつて飛び出したと思ひ

ねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたち、つてけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん畜生ちきしやうつて気で追っかけてとうとう泥溝どぶの中へ追い込んだと思ひねえ」「うまくやったね」と喝采かつさいしてやる。

「ところが御めえいざつてえ段になると奴め最後さいごつ屁ぺをこきやがった。臭くせえの臭くねえのつてそれからつてえものはい、たち、を見ると胸が悪くならあ」彼は

ここに至つてあたかも去年の臭気を今いまなお感ずるごとく前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻わした。吾輩も少々気の毒な感じがする。ちつと景気を付けてやろうと思つて「しかし鼠なら君に睨にらまれては百年目だろう。君はあまり鼠を捕とるのが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥つて色つやが善いのだろ

う」黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも

反対の結果を呈出^{ていしゆつ}した。彼は喟然^{きぜん}として大息^{たいそく}してい

う。「考^{かん}げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をと

ったって——一てえ人間ほどふてえ奴は世の中にい

ねえぜ。人のとった鼠をみんな取り上げやがって交

番へ持って行きやあがる。交番じや誰が捕^とったか分

らねえからそのたんびに五錢ずつくれるじやねえか

。うちの亭主なんか己^{おれ}の御蔭でもう壹円五十錢くら

い儲^{もう}けていやがる癖に、碌^{ろく}なものを食わせた事もある

りやしねえ。おい人間でもものあ体^{てい}の善^いい泥棒だぜ」

さすが無学の黒もこのくらいの理窟^{りくつ}はわかると見え

てすこぶる怒^{おこ}った容子^{ようす}で背中の毛を逆立^{さかだ}てている。

吾輩は少々気味が悪くなつたから善い加減にその場

を胡魔^{ごま}化^かして家^{うち}へ歸^{かへ}つた。この時から吾輩は決して

鼠をとるまいと決心した。しかし黒の子分になつて

鼠以外の御馳走を^{あさ}獺つてあるく事もしなかった。御

馳走を食うよりも寝ていた方が気楽でいい。教師の

家^{うち}にいと猫も教師のような性質になると見える。

要心しないと今に胃弱になるかも知れない。